年　組　名前

道新でワークシート

タンチョウ悠々 時代超え

厳しい寒さの中、鶴居村の雪裡川で羽を休めるタンチョウ。数羽が一斉に飛び立った＝2020年12月21日午前７時20分（加藤哲朗撮影）

釧路管内鶴居村を流れる雪裡（セツリ）川で、百数十羽のタンチョウが水の中に立ち、羽を休めていた。昨年12月下旬の早朝、気温は氷点下17度。朝日に照らされ、美しく染まった川面に水蒸気が立ち込めると、数羽が白く大きな羽を広げて一斉に飛び立った。

タンチョウは国の特別天然記念物。その保護を目的に、環境省は毎年11月から翌年３月にかけ、同村内２カ所と隣の釧路市阿寒町内１カ所の計３カ所で給餌を行う。雪裡川などのねぐらで夜を過ごしたタンチョウは、日中になると給餌場に姿を現す。例年なら国内外から大勢のカメラマンや観光客が訪れるが、今冬は新型コロナウイルスの影響で、人影は少ない。

長年研究を続けてきた専修道短大の正富宏之名誉教授(88)によると、タンチョウの背の高さは約1.5㍍、羽を広げると幅約2.4㍍にもなる国内最大級の野鳥だ。日本で観察されるツル７種類の中で唯一、現在も国内で繁殖している。漢字では「丹頂」と表記する。頭（頂）が赤い（丹）ことが名前の由来とされる。

優美な姿は古来より人々を魅了し、屏風（びょうぶ）絵や水墨画、浮世絵の題材として描かれた。「ツルの恩返し」など民話にも登場する。「めでたい鳥」と珍重され、宮廷料理の食材として、江戸時代には将軍家から朝廷への献上品となった。アイヌ民族の人たちは、湿原の神を意味する「サロルンカムイ（またはサルルンカムイ）」と呼んできた。

江戸時代、タンチョウの生息地は道内全域に及び、冬期間は関東地方にまで餌を求めて渡った。明治以降は、狩猟による乱獲と、生息地となっていた湿原が農地開発され、個体数は激減。20世紀初頭には絶滅したと考えられていた。

ところが、1924年（大正13年）、釧路湿原のキラコタン岬付近（鶴居村）で十数羽が発見された。道が52年度に初めて行った越冬分布調査では33羽を確認。保護を目的に、阿寒町（現釧路市阿寒町）の農家らが50年ごろから餌を与え始め、鶴居村などにも広がった。84年からは国の事業として給餌に取り組む。

生息数は給餌により、千数百羽に回復した。生息地は給餌場がある釧路管内に集中し、感染症がまん延する恐れがあるため、分散化が今後の課題となる。正富教授は「できるだけ人に頼らず、道内に広く生息できるようになるのが理想」と話す。（中野訓）

2021年2月13日（土）朝刊　全道版　23ページ（記事は再編集しています）

年　　組　　名前

道新でワークシート

①時期ごとのタンチョウの個体数や生存状態の変化について表にまとめましょう。

時期	個体数や生存の状態
明治以降	
20世紀初頭	
1924年	
52年度の越冬分布調査	

②一時期は絶滅したと考えられていたタンチョウの生息数が千数百羽にまで回復したのは何をしたからでしょう。漢字2文字で答えましょう。

③記事の内容を参考にして、この記事に使われている写真にキャプション（写真の説明文）を付けましょう。